

「翻訳者」としての井伏鱒二

——『鯉』を中心として——

熊 澤 帆 乃 佳

はじめに

井伏鱒二は九五年の生涯を閉じるまで、独特のユーモアとペーソスを湛えた作品を数多く世に残してきた。徳永惇は井伏文学について、「戦後の時の流れのうちで、多くの作家が挫折し、転向し、自失し、自殺し、行方不明になっていったなかで、井伏鱒二は、いつも時流の傍らにたたずみながら、人知れずさまさまの工夫をこらし、腕をみがき、着実に自己を表現してきたように思われる。」⁽¹⁾と述べる。井伏はいつでも時代に迎合せずと自身の文学世界を確立していった純文学作家なのであった。また、熊谷孝は井伏作品の文章について、

井伏の愛弟子の太宰治が書いた『古典風』という作品。どなたもお読みになっていらつしやるだろうと思いますが、あ

の中に、

所詮は、言葉だ。やっぱり、言葉だ。すべては言葉だ。

というのがありますでしょう。やっぱり、言葉だ、すべては言葉だ、といえるような言葉のすぐれた選択と配列になって来ないと、その文章は文学作品の文章だとはいえないわけです。文学作品の文章の第一条件は、文体のある文章であるということですからね。

井伏作品の場合は？といえますと、例外はむろんありますが、少なくとも書きたくて書いたような作品は、選抜された材料と、その材質に合った言葉による加工、言葉自体の加工によつて仕上げられた芸術品なのですね。⁽²⁾

と述べる。本論では、井伏作品が趣向を凝らして選抜された言葉で構成された芸術作品であるという熊谷の主張を参考に、井伏

作品における言葉の力を証明することで、その魅力を解き明かしていきたい。

具体的には、井伏鱒二の初期短編小説である『鯉』という作品を題材に、言葉にひそむ力を巧みに用いて物語を描く、井伏の文学世界の側面に焦点を当ててみることを試みる。『鯉』は、井伏鱒二による青木南八への追悼文であると多く論じられてきた。和田利夫は「井伏鱒二『鯉』の成立と背景」の中で、「亡友を悼む気持ちの強さ、深さが、『鯉』という作品に結晶して、作者の作品そのものに対する愛着となつてあらわれるのである。厚く張りつめた氷の下の鯉の姿は、冥界においてもなお群を抜く亡き友の姿ではないだろうか。」と述べる。和田は、結末部で「私」により描かれた大きな鯉が青木南八の偉大さを表していると論じているが、それではなぜ、青木が「私」に贈つたものが「一尺の白色の鯉」である必要があつたのだろうか。「一尺の白色の鯉」であつた必要性については他の先行研究でも見受けられない。本論では、作品中における「一尺の白色の鯉」という言葉の機能を中心に、テキスト分析を用いて作品全体を考察していく。また関連作品として『鯉』と同様、井伏の青春時代の実体験が軸となつた『休憩時間』や、物語全体が翻訳調の文体で表現されている、登場人物たちのディスコミュニケーションの様子を描いた『ジョセフと女子大学生』

という作品についても触れ、井伏の表現する言葉の力、さらにはその限界についても論じていく。

一 同性間における恋愛的感情

『鯉』本文において、「私」の男性的なトーンが表れている箇所が見つかるとは、それは、「私」が失職後、母校である早稲田大学のプールの見学に毎日通い、金網に顔を寄せ後輩の泳ぐ姿を見つめる描写である。プールで泳ぐ学生の肢体を眺めながら深い嘆息をもらすという描写からは、「私」にはホモセクシャル的な感情があるのではないかと推測できる。

また、「私」と青木の母校である早稲田大学は、かつて少年の危険地帯であつたという歴史がある。丹尾安典は『男色の景色』にて、早稲田近辺は、少年の危険地帯であつたらしい。今東光は、谷崎潤一郎が「……俺の小さい頃は、決して戸山ヶ原などに独りで遊びに行くんじゃない」「早大生にふんづかまると、おかまを掘られるから」といつた話を『十二階崩壊』のなかで伝えている。⁽³⁾

と述べる。早稲田大学は一九二一年に聴講生として初めて女性十二名が入学した。井伏鱒二は一九二一年九月、早稲田大学予科一年に入学し、その後一九二〇年から一九二一年にかけて休学、中

退している。井伏が早稲田大学に在学中はまだ、学内に女生徒がいなかったということだ。当時女子のいない早稲田大学という環境において、男色はそれほど珍しいことではなかったのだと推測できる。

次に、井伏鱒二による自伝『鶏肋集』の記述に注目する。『鶏肋集』には井伏の早稲田大学在学中の出来事が綴られており、当時の文学部長であった片上伸が「肩口先生」の名で登場している。ここでは、片上による井伏に対する異常ともいえる言動と、井伏が大学を休学するに至った経緯が書かれた箇所を参照する。

私たちは月に一回か二回、肩口先生の自宅を訪問し、文学談をきいて先生を崇拜していた。しかし肩口氏は体質的に非常に気の毒な人で、たまたま人のいないところで教え子を見ると、目の色を変え身ぶるいする発作を起こすことがあるということであった。これは医学の書物にも云ってあるように難病の一つだと云われている。或るとき肩口氏は、恩賜館の三階研究室に学生を一人ずつ呼び寄せて口頭試問をした。(中略) そのとき私の順番が来たので研究室に出かけて行くと、肩口氏は私の下宿の町名番地をたずねて手帳に書きとめたが、途端に例のその発作を起こそうとした。これはたいへんだと私が仰天して逃げ出そうとすると、肩口氏は腕をのばして私

の襟首をつかんだ。猛烈な握力であった。それを握きとつて私がドアを明けてとび出すと、肩口氏も廊下にとび出した。

(中略)

講義がおしまいになって私が下宿に帰つて来ると、間もなく繻子の絆纏に稲穂のマークをつけた俵夫が私の下宿に訪ねて来た。肩口氏からの手紙を持参した学校専属の俵夫である。手紙には今日のことを絶対に他言してはいけないと書いてあった。そしてもし他言したら君はどんな目にあわされるか知っているだろう。君もそれを知らないほどのばかりではあるまい。尚お念のため歸りに君の下宿に寄つて諒解を求めたい。必ず下宿にいるようにという手紙であった。

(中略)

最早や私は先生の講義のときには教室に行かなくなっていたが、先生の授業を受けないものは落第させられることになつていた。学校内で先生は非常な勢力家であった。私は世の無常を感じて当分休学するつもりで度胸をつけ、そうして先生の呼び出しに応じ級友を二人つれて先生の自宅を訪ねた。⁽⁵⁾ このようなことがあつて、井伏は結局大学を中退したのである。自伝の描写から読み取れるように、片上が井伏に対して男色を迫つたということは明らかである。

さらに、森鷗外も一九〇九年に発表した「モタ・セクスアリス」にて、一二歳の頃、年上の生徒に狙われ男色を迫られるといった話を書いている。これらのことから、明治から大正にかけて、旧制高校の寮や大学内において男色が珍しいことではなかったということが読み取れ、「私」が同性である青木南八に恋愛的感情を抱いていたとしても不思議ではないということが証明される。

二 「私」と青木の関係

次に、「私」と青木に同性間の恋愛的感情があるという仮説を軸に、青木がおくった白色の鯉が表す意味について解き明かす。まず、『文学シンボル事典』の記述によると、白は、「心にもないということは言わないというし」であり、「正直で裏表のない」「清潔な」「清潔な」という意味を持つ。さらに、「漢字源」にて「内容をはつきり声に出して話す」「告白」という意味があるとの記述も見つかる。また、同じく『漢字源』には、鯉という字には「手紙」「便り」という意があると記されている。同音異義語の「恋」の意をかけ合せていると考えると、「真白い鯉」とは、青木が「私」に対する正直な想いをのせた恋文であると推測できる。

では、なぜ鯉という字に手紙という意味があるのだろうか。『漢字源』には、鯉の腹の中に絹地に書いた手紙を入れて届けたこと

から、「鯉素」という言葉が生まれた、とある。『大漢和辞典』によると、「鯉素」とは「鯉魚尺素」の略であり、「古楽府」飲馬長城窟行の漢詩が由来だという。これは、夫が遊蕩して帰らないのを、その妻が書信を届けてくれる客をひたすら待ちわび、嘆いている歌である。ここで、小尾郊一、岡村貞雄の『古楽府』に載る漢詩の書き下し文と、現代語訳を参照する。

客 遠方より来り 我に遣（おく）る 双鯉魚を

児を呼びて鯉魚を烹（に）れば

中に尺の素書あり

長跪（ちやうき）して素書を読む

書中 竟（つひ）に何如（いかん）

上に言ふ 餐飯（さんぱん）を加へよと

下に言ふ 長（とこしへ）に相憶ふと

河辺の草が青々ともえてくると、わたしは遠い道のはてにいる人のことを思いつづける。遠い道のかなたであるから、思うこともできないが、昨夜は夢の中であの人に会えた。夢の中で会えば、わたしのそばにいたのに、ふつと覚めてみれば、あの人は他郷であった。他郷であるからそれぞれ県が違っ

ているため、いくら寝返りしながら暮しても、見ることはできない。葉を落とした桑が、かえって空ゆく風のけはいを感じ、海の水がかえって遠い天の寒さを感じとる。(そのように、夫と離れているわたしのような者こそ、最もせつなく夫を慕わずにはおれないのに) 他の人たちは家に帰って来て、めいめい自分をいとおしむだけ、誰が他人のことづてなどを伝えてくれようか。

ある日、旅人が、あの人のいる遠い地方からたずねてきてくれて、わたしに二匹の鯉をくれた。わらべを呼んで鯉を煮させてみると、鯉の腹から一尺の白絹に書いた手紙が出てきた。立て膝のままそれを読んだが、手紙の中には、つまりどんなことが書いてあつたろうか。初めには「御飯を食べるように」とあり、終わりには「いつまでもおもしろい続けている」と書いてあつた。⁽⁶⁾

『鯉』本文とこの漢詩には、二つの類似点がある。まず一つは、双方とも鯉が遠方からの贈り物であるという点である。青木は「餘程遠い在所の池から獲つて来たものである」と「私」に告げたと本文には記されている。二つ目は、漢詩では鯉の中に入れた一尺の白絹(手紙)にて夫の妻への思いが綴られていて、『鯉』本文で

は一尺の白い鯉そのものが恋文として描かれているという点である。このことから、「鯉素」という言葉は、本文中で一尺の白い鯉が恋文(青木の私に対する想いそのもの)として機能しているという根拠であると言える。作者である井伏鱒二は、「鯉素」という言葉を意識し、この作品を書いたのだとも推測できる。

この漢詩の妻は、遠い所にいる夫を切なく想い続けているにも関わらず夫からの書信がないのは、他人が夫に代って問いたずねてくれないからだ、と嘆いていた。ひたすら、書信を届けてくれる客を待ちわびていたのである。旅人が夫の代わりに手紙を届けてくれたのは、まさにその願いが報われたということである。さらにその手紙には「いつまでもおもしろい続けている」とあり、この手紙により妻の夫への想いも成就したといえる。「私」がこの漢詩の妻のように青木を想い続けていたとすると、青木が白い鯉をくれたことは、「私」の想いが報われたということを表しているといえるのかもしれない。そして「私」が白い鯉(青木からの告白)を受け取ったことで、お互いへの密かな想いが成就したのである。「私」はさらに青木の想いへの返答として、「彼の厚意を謝して今後決して白色の鯉を殺しはしないことを誓った」のである。まさにこれは「私」の愛の誓いであり、白い鯉は青木と「私」の愛の証として機能していくことになる。青木と「私」の間に一種の契

約関係（愛の契り）が結ばれたのである。

さらに「私」と青木の恋愛関係の根拠として、「私」が鯉を無花果の葉で覆ったという描写も挙げられる。無花果の葉は旧約聖書『創世記』に登場しており、アダムとイヴが無花果の葉で腰帯を造ったことは有名である。無花果の葉とは性の意識の象徴であり、本文中の鯉を無花果の葉で覆うという表現は、互いを性の対象として意識していることを象徴、暗示しているのだといえる。

青木から鯉を受け取った私は、博覧会の臺灣館で購入したサポテンを贈っている。この博覧会とは、青木が死去した一九二二年に開催した平和記念東京博覧会であると推測できる。『コレクション・モダン都市文化第七六巻 博覧会』によると、この博覧会は東京の上野公園敷地内の不忍池畔にて開催され、入場料は大人平日六十銭、日曜祝祭日は八十銭であつたらしい。サポテンについては、『花卉園芸大百科十六 観葉植物／サポテン／多肉植物』に載るサポテンの歴史を参照する。

確かなことはわかっていないが、日本で初めてサポテンが記録されたのが元禄元年（一六八八）、貝原益軒の「和爾雅」とされている。であるから、三〇〇年以上も昔ということになる。以来導入が続けられ今日に至っている。したがって我が国のサポテンの歴史は三〇〇年以上ということになる。

サポテンは南蛮人によって日本に伝来し、以降石鹼や薬品、觀賞用として広く普及していた。右の文献によりその歴史の長さがうかがえる。よつて一九二二年頃の当時においてもサポテンは一般的であり、わざわざ博覧会の台湾館まで行かずとも近隣で購入出来たはずだと推測できる。それにも関わらず、「私」はサポテンのために早稲田からはるばる上野の不忍池畔に向かい、六十銭（もしくは八十銭）の入場料まで支払つて青木のために見舞いの品を用意した。「私」のこの行動は、青木への好意の返報とも考えられるのではないだろうか。青木が用意した鯉の「余程遠い所の池」と「博覧会の台湾館」はどちらも相手のために遠方に赴いているため、特別な手間を掛けているといえる。これは心を込めたもてなしや歓待と言ひ換えることも出来るだろう。つまり「私」は青木から受けた丁寧なもてなしに対して、自分もまた厚意を返しているのである。

では、なぜ「私」は「大小二十四個の花をつけたサポテンの鉢植え」を贈つたのだろうか。まず二十四という数字は、一般に幸運の数と言われており、サポテンは熱烈な愛を表す（参考『イメージ・シンボル事典』）。また、サポテンの花言葉は「枯れない愛」「秘めた熱意」である。よつて二十四個の花をつけたサポテンとは、「私」と青木の幸せな秘密の恋の象徴であると考えられる。だが、

ここで注目したいのは「鉢植え」という点である。通常、見舞いの品として鉢植えを贈るのはタブーとされる。それは「鉢植え」が「根付く」という性質を持ち、「寝付く」という言葉が連想されるためである。つまり一般に鉢植えを贈ることは、患者の病気が長引くことを暗示させ忌嫌われるのだ。青木に恋愛感情を抱く「私」は彼の回復を望まないわけがないため、疑問が残る場面である。

しかしここでの疑問は、青木南八という名前によって解き明かすことができる。「青木」の「青」は①五行では木、五時では春、五方では東に当てる②わかわかしい、なまなましい。「青春」(『漢字源』)、「木」は①き。葉や花をかぶったたちき。また広くたちき。②物をつくる材料としてのき。③五色の一つ。五時では春、五方では東に当てる五色では青、五声では角、十干では甲と乙に当てる(『漢字源』)とあり、どちらの字も「青春」を表す。さらに「南八」の「南」は『シンボル事典』に「太陽の照り輝く南国は、『熱情』『青春』『活気』『躍動』の場である。」とあるため(青春の)恋を表し、「八」は①基数の8。②序数の8。③八回、八度。④わかる。わかれる。(『漢字源』)とあり、別れを意味する。「青木南八」とは、「青春時代の恋は終わってしまう」という名前であったのだ。つまり「青木南八」という名前からは、私と青木の恋は近い将来

(学生でなくなり青春時代が過ぎ去れば)破綻する運命であることが読み取れる。これを踏まえると、鉢植えを贈った「私」には、恋を根付かせ永遠のものにしたいという願いがあつたのではないかと考えられる。「青木南八」の「八」が持つ「別れ、終わる」といった強力な負の要素を塗り替えるべく、同じ音の「鉢」を使って二人の恋路を方向転換させているのであると考えられる。「私」は鉢植えを贈ることで、青春の恋が終わってしまうのを抑止し、青春の恋を永遠に存続させることを試みたのである。

それでは、「私」の願いは成就したのだろうか。本文には、「亡き彼の柩の上に、彼の常々かぶつてゐたおしる粉色の角帽と並べて私の贈つたシャボテンの鉢が置いてあつた。」とある。この角帽は青木が日々身に着けていた制帽であるから、青木の一歩の形見といえるかもしれない。その角帽の隣に「私」の強い願いが込められたシャボテンが置かれた。置かれた場所が「柩の上」ということは、同じ墓に入りこれから永久的に共にあることを意味する。これは「二人の青春の恋は永遠に続く」という暗示であるともいえるため、「私」の願いは見事に成就したと考えられる。青木が死去したことにより、結果としては二人の恋を完全に根付かせることに成功したのである。

三 「私」と愛人の対決

青木の告別式で、彼の柩の上に角帽と自身が送ったサボテンが並べられているのを見た（二人の恋を完全に根付かせることに成功した）「私」は、一刻も早く愛人の家の泉水から鯉を取り戻そうと考える。そして鯉を取り戻すための、愛人との手紙のやり取りが行われる。本文では、青木の靈魂が誤解しないようにと「私」と愛人の手紙を全文記載する、とあるため、本文から推測できる「私」の思う「誤解」について、手紙を全文記載することで生まれる効果について考える。

白い鯉は、青木と「私」にとつて恋文の役割をしていると前述した。よつて、青木が「私」に対して白い鯉を送ったこと、「私」と愛人が手紙でやり取りをしている描写は、手紙の意味合いは違うというものの、非常に類似した描写であることがわかる。そこから、「私」が手紙の全文を載せたのは、手紙を交わす「私」と愛人の間に恋愛的感情があると青木に誤解される、と考えたからではないだろうかと推測できる。「私」は青木に対して「私」と愛人の間に恋愛的感情は何もないということを証明したかったのである。

また、愛人の手紙の「魚だけ」という表現や「少し乱暴」「べつ

に」などの挑発的な言い回しからは何が読み取れるだろうか。鯉が青木からの私への想い、さらには愛の証として機能しているということを踏まえると、愛人の「魚だけ」という表現からは、青木と「私」との愛のみは持ち帰って良い、というニュアンスを読み取れる。愛人との愛までは奪うことはできない、という愛人の主張が垣間見えるのである。手紙を全文載せたのには、挑発的な態度を青木の靈魂に見せるという青木への告げ口の効果も推測できるだろう。

しかし、青木の柩の上に置かれていたのは角帽（「私」と「青木」青春の象徴）と、「私」が青木に送ったサボテン（青春の恋を永遠に存続させる）である。青木の愛をめぐる「私」と愛人の対決はここで決着がついているのだから、愛人の主張や挑発的な態度は、「私」からすれば嫉妬心からの負け惜しみのようなものである。「私」は愛人の負け惜しみのような主張に憤慨し、愛人の家の枇杷を叩き落とし、無断で食べるという行動に移ったのである。

また、愛人の家の枇杷を食べてしまうという行為には、どのような効果があるのか。なぜ枇杷の実である必要があったのだろうか。『暮らしのことば新語源辞典』には、枇杷の語源について「も」ととは、葉の形が楽器の琵琶に似ていることからその名があるとされる。ただし、葉の形は似ておらず、琵琶に似ているのは、

むしろ実の形であるとする意見もある。」と記されている。琵琶といえは、琵琶を持つ神である弁才天が連想される。弁才天とは、「もとインドの河神で、のち学問・芸術の守護神となり、吉祥天とともにインドで最も尊崇された女神」（『広辞苑』）である。『ブリタニカ国際大百科事典』のインドの河神・サラスヴァティーの項目には、「弁才天と呼ばれ、（中略）日本でも、弁才のほこらが多く水辺にあるのはもともとの河川信仰を伝えている。」とある。加えて、弁才天は嫉妬深い女神として知られている。琵琶を持つ水の女神であり嫉妬深いという弁才天の特徴は、家の庭に枇杷と池を持ち「私」に嫉妬心を持っている愛人の特徴と類似しているといえる。そこで愛人の後ろ盾に弁才天の力が存在していると仮定すると、「私」の枇杷を食べてしまうという行為は、弁才天の力を弱めるという意味があつたのだと考えられる。

では、なぜ弁才天の力を弱める必要があつたのか。それは、弁才天が竜を鎮圧したという弁才天の江ノ島縁起と関係していると考えられる。中国の後漢書には、黄河の竜門の急流を登つた鯉は竜になるという伝説が載っている（参考『漢書・後漢書・三国志列伝選』^⑩）。日本では「鯉の滝登り」ということわざで知られ、文部省唱歌「鯉のぼり」の三番の歌詞にも、「百瀬の滝を登りなげ、忽ち竜になりぬべき、わが身に似よや男子（おのこ）」と、空に

躍るや鯉のぼり。」^⑪とある。竜が鯉の別体であることを踏まえると、江ノ島縁起とは弁才天が鯉の別体を鎮圧したという伝説であると捉えられる。

本文中にも、白色の鯉が竜になるということが暗示されている箇所が見つかる。それは、「私」が鯉を自分の傍に持つていくために、春蠶のさなぎ蟲で鯉を釣り上げる描写である。『世界シンボル辞典』によると、さなぎは変身、変化のシンボルである。そのためさなぎで鯉を釣るという描写は、鯉の竜への変身を暗示していると考えられる。「私」は鯉を殺さないための手段として、釣り上げた鯉を愛人の池に預けることにした。しかし江ノ島縁起（弁才天が竜（鯉の別体）を鎮圧する）を踏まえると、白い鯉がもし竜になってしまえば、鯉は弁才天（愛人）の力により鎮圧されることになる可能性がある。鯉の鎮圧を阻止するためには、弁才天の力を弱めなければいけなかつたのである。よって、愛人の家の枇杷をたたき落としたり挙げ句無断で食べてしまうという「私」の行為には、琵琶を排除し、弁才天の力を弱める効果があるといえるのだ。

四 「私」にとつての鯉の存在

鯉は作品の中で、瓢箪池、愛人の池、早稲田のプールといった

順で移動する。本節ではまず、それぞれの移動の意義について明らかにする。

まず「私」は、瓢箪の形をした池に鯉を放つ。『世界シンボル事典』によると、瓢箪とは「宇宙の縮図、自然の創造原理、最初の両親の根源的一体性」を表す。ここでは、瓢箪が宇宙の縮図を表すという点に注目する。宇宙について、『新明解国語辞典』では「①あらゆる天体をつつみ込んだ、われわれの周りに果てしなく広がる空間、②それだけで秩序ある統一を持った世界。」と記されている。よって瓢箪池は、宇宙のような果てしなく広がる、鯉にとって自由な空間であると捉えることができる。瓢箪池に鯉が存在している間は、「私」と青木の恋愛も自由であると読み取れる。また、鯉の放たれた瓢箪池には鯉が生息する。作品の舞台は関東地方であるため、この鯉は鯉の種類の中でも一般に知られ、関東地方で多く生息するギンブナであると推測できるが、『日本国語大辞典』によるとギンブナは「地域（例えば関東地方）によっては、雌魚だけで雄が見られない」らしい。これにより作品に登場する鯉は女性の象徴であると言えるが、瓢箪池は鯉にとって自由な空間であるため、鯉（女性、愛人）などの恋の弊害があっても気にすることなく生息することができたのである。だからこそ「私」が鯉を釣りあげたとき、鯉は鯉の先に寄生虫を宿らせていたにも関わ

らず、「鯉は白色のまま少しも痩せてはゐなかつた」のである。

次に鯉は、「私」によって愛人の池に放たれることになる。それは、鯉を生かし続けるための手段であつた。「私」の引越しの事情で、安泰な瓢箪池に鯉を置いておくことができなくなつたため、「私」は鯉を殺してしまうか、青木の愛人に鯉を託すか、という選択を迫られる。なぜ「私」が愛人に鯉を託すことを考えたかというと、愛人は女性であるため、結婚や出産といった一般的な幸せを青木に提供することができるからであると推測する。「私」は、青木の幸せには「私」より愛人が適切だと考えたのだろう。また「私」は一度、鯉を殺すことを考えた。しかし鯉を殺すことは、単に青木との恋愛関係を帰結させるという意味だけでなく、「私」が青木に恋する感情、思慕することをも停止させる行為であると考えられる。だがやはり青木を愛しく思う心までは、簡単に消すことができなかったのだ。よって「私」は、青木の幸せのために実際の恋愛関係を失つても「私」自身の感情は生かそうと、鯉を愛人に託し、生かし続けることを選んだのである。

最終的に「私」は、青木が死去したことによって愛人から鯉を取り戻し、母校である早稲田大学のプールに鯉を放つ。鯉を取り戻したのは、青木の死により事実上の青木と愛人の恋愛関係が破綻したことで、鯉を託しておく理由が消失したからである。次な

る鯉の居場所として「私」が選んだのが、早稲田大学のプールであった。早稲田大学は、「私」と青木が共に青春時代を過ごした思い出の地である。柩の上にサボテンの鉢植えと角帽が置かれていることは、「二人の青春の恋は永遠に続く」という暗示である。前述したが、この柩の上に置くという動作は少なくとも「私」と青木以外の第三者によるものである。よって鉢植えを贈ることで恋を根付かせたいと願ったのは「私」だが、鉢植えを柩の上に置いて実際に恋を根付かせたのは「私」ではないため、受動的なものであるといえる。一方、早稲田大学のプール（青春の地）に鯉を放つという動作は「私」の自発的な動作である。鯉を取り戻し、早稲田大学のプールに放つという行為からは、能動的に恋を永続させるという「私」の強い意志がうかがえる。

最後に、『鯉（随筆）』と『鯉（小説）』における結末部の違いを比較する。その前提として、まずは「私」という人間について掘り下げる。失職後、母校である早稲田大学のプールの見学に毎日通い、後輩の泳ぐ姿を見つめるという行動を中心に「私」について考えていく。

「私」は大学卒業後、就職しようだが失職してしまっているという点から、社会的弱者であるといえる。さらに、再就職するだけでなく徒に時間を持て余していることから再就職への無気力さが

読み取れ、後輩のプール見学を繰り返しているという行動は、現実逃避の要素がある行動だといえる。また、在学中は下宿していたということから、地方出身者である可能性が高く、失業後も実家に戻っていないため、「私」は社会的に立場が不安定かつ、孤独で惨めな生活を送っていると考えられる。そのような「私」にとつての唯一の誇りが、青木との恋（鯉）であったのかもしれない。しかし、青春は過ぎ去り、青木は死去し、「私」に残ったのは鯉のみであった。だからこそ、「私」は鯉に執着しているのだと推測できる。鯉がいなくなつては、「私」は生きていけないのである。

「私」にとつて鯉が、誇ることで唯一の存在であることを前提に、随筆と小説における結末部の違いについて考えると、両者の違いは実物の鯉に対する執着の有無にあるといえる。随筆は、「かくして私の鯉は未だ死なないうで、プールの中の他の魚類達に威張っているのである。私はそれを想つて常に安心を覚える。今後引越しても、鯉だけは連れて行かないつもりである。」という結末である。随筆では鯉が生きていることが明らかになっており、「私」が実物の鯉の姿を確認して安心するところで終わる。一方、小説では鯉の生死は不明で、「私」は鯉の絵を描くことで満足する。小説の「私」は、鯉の絵を描くという行動で、鯉を心の中のイメージとして定着させることに成功したのである。つまり、鯉を心の

中に住まわせることで「鯉は永遠に生き続ける」ことが可能となったのだ。実物の鯉（の生死）に執着するのは止め、代わりにイメー
ジの鯉を抱くことで、「青木との恋」を守り続けたのである。

加えて、「私」が自ら描いた鯉の長さが三間以上もあつたという表現について注目したい。「私」は実物の鯉より大きく描くことにより、青木への愛情の大きさを表現したのではないかと推測できるが、三間もの長さからは鯉のぼりの大きさを想起させる。鯉のぼりを飾ることは、前述した登竜門（鯉の滝登り伝説）が由来であり、鯉のぼりには男子の成長への願いが込められている。鯉のぼりの唱歌に、「百瀬の滝を登りなば、忽ち竜になりぬべき、わが身に似よや男子（おのこ）と、空に躍るや鯉のぼり。」という歌詞があるとも前述したが、この唱歌によると鯉は竜になり、「わが身に似よや」と男子を励ますのである。よつて「私」が心の中に宿した鯉は、竜に変化を遂げ、これから先も「私」を励まし心の支えになると考えられる。「私」の抱えていた悩みとは、青木との恋の悩みであり、自らの手で鯉を竜へと変化させた私は、青木との鯉（恋）の呪縛から解き放たれた。「すでに十幾年前から私は一ぴきの鯉になやまされて来た。」という文で始まり、「私はすっかり満足した。」という一言で結末を迎えるこの物語は、「私」の悩みが解決されたことによって、幕を閉じるのである。

五 関連作品として

関連作品として、同じく井伏の短編小説である『休憩時間』『ジョセフと女子大学生』を取り上げる。『休憩時間』は『鯉』同様、井伏の青春時代の実体験を下敷きにしており、井伏の自伝『鶏肋集』に収録されている「青木南八」という回想録の一場面に加筆修正し、小説にしたものである。『鯉（随筆）』と『鯉（小説）』の大きな違いは結末部のみであつたが、「青木南八」という回想録と『休憩時間』には異なる点、加えられた要素が数か所確認できる。その中でも最も大きく異なるのは、下駄履きの学生が黒板に何を書きつけたのかという記述の有無である。本文中には、学生監に捕えられた下駄履きの学生が書いていたものが「ごぞの雪、いまいづこにありや」という絶唱に価すべきヴィヨンの詩の一行であつたということが強調しているかの様に繰り返して記述されているが、『休憩時間』の基となつた回想録では学生が何を書いていたかは明記されていない。ヴィヨンの詩が作品にもたらす効果とは何か。

フランソワ・ヴィヨンは中世最大の詩人でありながら、パリ追放となつた犯罪者であつたことが知られている。佐藤輝夫は『ヴィヨン詩研究』の中で、

ヴィヨンがここに達するまでの精神の歴史には長い遙かなるものがあつた。貧乏で、その貧乏克服の手段として嵌り込んだ悪の世界に住みながら、持前の無頓着さから聊かの悔悟も感じなかつた彼である。かうした悪の世界、法との確執は、必然的に彼を牢獄に導いてゆく。と、その都度、彼は法の前に卑屈して、何等それに反抗はせぬ。諦めて、それは運命の仕業であると考へる。(中略)そしてその運命の苛責の第一歩は、彼が貧困に生れたことになると考へる。¹³⁾

と述べる。校則を犯しながらも诗情にひたる下駄履き(貧乏をわざと自慢するような、当時の「蛮カラ」スタイル)の学生と、犯罪者であつた詩人ヴィヨンが重ねられていと推測できるだろう。さて、下駄履きの学生が書いた「こぞの雪いまいづこにありや」という一行は、総行数二千行をこえるヴィヨンの第二詩集『遺言集』の中の「昔の貴女のバラード」で繰り返されている有名なフレーズである。そのバラードの中でヴィイオンは、古の伝説的美女を引き合いに出して、人の世のはかなさや無常観をうたっている。また、「昔の貴女のバラード」の前には、ヴィイオンが青春時代を懐古している箇所が見つかる(参考『ヴィヨン詩集成』「ヴィヨンの遺言書」¹⁴⁾)。ヴィイオンは、尊い青春時代を無駄にしたと悔やみ、時の経過の速さを痛感し、昔の仲間たちが今ではどうなつてい

かという思いに駆られる。ここでいう昔の仲間について、佐藤輝夫は「そのいく歳月の経過して、あるものは既にみまかり、あるものは大名に大家に成りあがり、あるものは赤裸の乞食と成り果て、またあるものは修道院に籠つてしまつたといふ、さうした詩人の悒鬱な述懐の調子から、それは彼の學窓時代の友、及び彼の巴里時代の所謂狂蕩無頼の友と解して然るべきであらう」と述べる。『遺言集』の中で青春時代、学生時代の友人を懐古するヴィヨンの姿は、自身の回想録(青春の記憶)を下敷きに『休憩時間』を書いた井伏と重なるともいえるだろう。

また、細川哲士はこの一連の詩について「過ぎ去つてしまつた青春への思いが、死への観想を生み、それが『去年の雪いまいづこ』のリフレインで有名な『昔の貴女のバラード』へと重なり、そして老残の嘆きを歌う次の『兜屋小町のバラード』は不幸な愛のテーマを喚起して、ヴィヨンの運命の女カトリヌ・ド・ヴォーセルへの思いをよみがえらせる。」と述べる。取り戻せない青春時代の懐古が、人の世の無常観をうたう「こぞの雪、いまいづこにありや」というフレーズに繋がっているとすれば、井伏の青春時代の思い出を軸にした『休憩時間』での「こぞの雪、いまいづこにありや」という一行は、青春時代のはかなさ、貴重さを表す機能があると考えられる。早大文学科の歴史文化が蓄積され

た由緒ある教室、自由な休憩時間の中で学生監らにヴィヨンの詩の詩情に浸るという自己欲求を阻害されたことは、下駄を履くことが校則違反であったとはいえ、学生にとって許しがたいことであつた。そして「こぞの雪、いまいづこにありや」の一行により「私」たちにとつて自由な休憩時間（早稲田での青春）が貴重なものであつたということを際立たせているのである。本文中に繰り替えされるヴィヨンの詩は、作品の基となつた「青木南八」という回想録（井伏の実体験）にはなかつた虚構といえる要素であるが、作品中でヴィヨンの詩は学生たちの青春時代のはかなさ、貴重さを表すという重要な機能を持つていたのである。

続いて『ジョセフと女子大学生』は、『夜ふけと梅の花』（一九三〇年四月、新潮社）に収められた短編である。この作品は物語全体が、翻訳調の文体で表現されているという特徴を持つ。女子大生が「私」に持つてくる、違和感のある日本語で構成された英作文の宿題、また「私」とアイルランド人ジョセフとの間で繰り広げられる英会話の様子が奇妙なものとして描かれている。「私」とジョセフは、英語でのぎこちない会話を続けていくうちに、途中で誤解を生むことになる。故国独立という革命の有望を抱くジョセフに感動し同情した「私」の発言から、ジョセフは「私」も同じような境遇の者であると勘違いするのだ。このようなデイスコミニュニ

ケーションが発生した原因とは何であるか。原因の一つとして、両者とも英語が母語ではないために、互いに言葉の表現が制限されているということが考えられるだろう。本文には「この殆ど罵倒に近い言葉を、彼は天気の挨拶だと勘違いしたらしく、彼の母国語でもって答えた。」「私は彼の母国語で（以下同じ）今にも逃げだしかねない彼に論戦をふっかけた。」とある。イギリスに支配されたアイルランドの母国語（公用語）は英語であつたようだが、実際のジョセフの母語（第一言語）は、英語ではなくアイルランド固有の言語・アイルランド語である。ジョセフの故郷アイルランドは、イギリスからプロテスタントへの改宗を強要されるなど、重度の宗教弾圧を受けてきた悲惨な歴史を持つ。ジョセフにとつて英語は、自国を支配しているイギリスの言語なのだ。

日本では一九二〇年代頃、アイルランド問題について盛んに論じられていた。上野格は、論文「日本におけるアイアランド学の歴史」にて、戦前日本のアイルランド研究は、とりわけ日本大正期の朝鮮植民地支配の参考資料として論じられてきたと述べている。

その三は、大正期の朝鮮植民地統治の最重要参考資料としてのアイアランド問題という扱いである。これは、支配側の側面であるが、同時に、植民地政策を批判し、民族独立

の問題を自らの問題として自覚する側からも、関心が集まっていた。戦前のわが国におけるアイランド研究のうちで、われわれの誇りうる唯一の例が、ここにある。¹⁷⁾

さらに矢内原忠雄が『經濟學論集』第六卷第三号（一九二七年二月）にて発表した「アイランド問題の發展」では、日韓、英愛關係の類似性を指摘したのち、「アイランド問題研究の實際的興味は吾人にとりては朝鮮（及び滿州、臺灣）あるが故である。」¹⁸⁾と述べている。この頃の日本は、朝鮮、滿州、台湾支配を狙っていたため、植民地支配という問題に対して非常に敏感であつたといえる。

自国のイギリスからの独立を願うジョセフと、朝鮮、滿州などの支配国の人間である「私」——全く違うバックグラウンドを持つ両者は、ちぐはぐな会話を展開していく。

「余は不覚にも泣きだしそうである。天涯の孤客の本日の清遊を妨げた余の罪を、汝は許せよ。おそらく汝は破廉恥罪によつて故国を追放されたものではあるまい。」

「それは真実である。そして汝もまた天涯の孤客であるか？」

「否、余は汝の純情と未来の行路難とのために嘆息するものがある」

「ああ、汝もまた汝の故国独立に心をくだき、かくの如く、わび住いに甘んずる人であつたか！」

「否、余の祖国は独立しているものである。余の風采の貧しげなるは余の習慣である。余は単なる失業者である」¹⁹⁾

自分に同情する「私」の様子から、ジョセフは「私」が自身と同じように故国独立を望む者であり、そのような境遇だからこそ「わび住いに甘んずる」者なのだと勘違いをする。ここでジョセフは、「私」が日本に在留する朝鮮人であると考えたのだと推測できるだろう。一九一〇年の韓国併合以降の在日朝鮮人の急増について、小林知子は、「すでに韓国併合以前から、日本には、留学生や季節労働として働く朝鮮人が在留していた。しかし、その数が急増するのは併合後である。内務省警保局統計に拠れば、人口は一九二〇年に約3万人、30年に30万人だが、実際はさらに多い」と述べている。さらに日本での朝鮮人の労働条件については、「強制連行された朝鮮人の証言」の中に「当時の朝鮮人の日本での生活は、植民地民族の悲哀を目の当たりにするようなものであつた。（中略）また、労働条件も劣悪なもので、賃金も日本人の約半分以下というのが常識であり、日本人が受けられる社会保障も、朝鮮人には適用されなかつた。」²⁰⁾という記述がある。「私」の同情心と

風采の貧しさから、ジョセフが「私」を厳しい労働条件に置かれた在日朝鮮人であると考えても不思議ではないだろう。日本人である「私」を、日本に支配された朝鮮人であると思ひ込む描写により、言語の問題だけでなく、国の持つ背景が異なるために通じ合えないという両者のコミュニケーション不全の所以が浮き彫りになっているのである。

また、空気銃を兵隊のように担ぎ、右手を大きく振って歩調をとりながら歩くジョセフと、彼に遅れまいと大膽に歩く女子大生の描写からは、革命の大望を持ちまもなく日本を発つジョセフと、ジョセフとのロマンスを夢見ている女子大生という両者の思惑の溝も表現されている。加えて女子大生が紙で修繕した硝子窓から吹き込む北風の描写は、三者のコミュニケーションの不十分さを表現していると読み取れるだろう。このように『ジョセフと女子大生』は、ジョセフと女子大生と「私」——三者三様のデイスコミュニケーションを巧みに表現した作品であるといえる。

六 井伏作品における虚構

井伏は『鯉(随筆)』の虚構性について、沼田卓爾がテープに録音したという談話の中で語っている。

青木南八に「愛人」はいなくなつたんだよ。(青木が亡くなつ

た)そのとき上野の松坂屋の前の反対側の空き地に勸工場ができた。そこでサポテンを買って青木の所へ持って行つたら、(青木の)お母さんが(二階から)降りて来て泣いているんだよ。(その時玄関に)靴がいろいろ脱いであつたんだ。急いで二階に上がって行くような感じで。(その中に赤い)靴が脱いであつた。その印象があるんだ。愛人はいないんだから、(釣りに)は行かなかつた。池は下宿屋の池で、コイはいやしない。青ミドロの(小さな)池なんだから。(青木からコイをもらつたことはない)が(ほかの人には)もらつた。子供のときに(いなかの池に)白いコイがいたの。随筆と言うより小説だな、あれは。⁽²⁾

『鯉』は井伏の青春時代の実体験を軸に描かれたといえど、愛人、白色の鯉は虚構の要素であるということである。また井伏は、中村明との対話において、自身の小説における虚構の効果について触れている。

僕は初めから決めてるんだ、うそを書いたら小説ってね。ただ、ほんとのことを書いても、小説欄に入れたほうがいいこともある。原稿料が随分違うんだ。えらい苦勞して旅行記を書いたって、小説よりうんと安いのね。

——金銭的なことは別にして、訴えたいことの性質も、小

説と随筆とでは違つてきますか、同じ素材から出発しても。

そう違わないと思うの。小説の時はうそを書いてもいいから突つ込んでゆけるし、そのほうが結局はほんとのことが書いて、他人に訴えるはずなだけども、むずかしくて、たいてい失敗するな。⁽²³⁾

小説に虚構の要素を加えること、すなわち現実から虚構への翻訳は、むしろ「本当のこと」を導き出す効果があるというのが、井伏の小説を書く上での考えだったということがわかる。井伏は虚構の要素である「一尺の白色の鯉」——「鯉魚尺素」に含まれた漢文の物語を用い、青木と「私」の恋の呪縛を描いた。言い換えれば、井伏は青木と「私」の恋を、「一尺の白色の鯉」——「鯉魚尺素」という漢文に翻訳して、井伏にとつての「本当のこと」を表現したのである。漢文を用いるということは、幼い頃から漢詩に親しんでいた井伏ならではの表現方法であるともいえるだろう。そして随筆から小説に直す際には、結末部を加筆し、「私」の心の中にイメージとしての鯉（＝青木との恋）を住まわせた。これにより、小説『鯉』は鯉への執着を断ち切り長年の悩みから解放されるという結末の物語に仕上げられたのである。

また、関連作品として取り上げた『休憩時間』は前述した通り、井伏の自伝『鶏肋集』に収録されている「青木南八」という回想

録を小説に直したものであり、回想録と最も大きく異なるのは、下駄履きの学生が黒板に何を書きつけたのかという記述があることだ。また、小説では下駄履きの学生が書いていたものが「こぞの雪、いまいづこにありや」という絶唱に価すべきヴィヨンの詩の一行であつたということが強調しているかのよう⁽²⁴⁾に繰り返して記述されていることも指摘した。井伏は下駄履きの学生について、

はじめ黒板にらく書きをして学生監に連れられて行く人物は、現在ロシア文学者になつてゐる梅田寛氏である。彼が学生監のところから解放されて教室に引返し、アララギ派の短歌を黒板に書きつけたのも事実である。⁽²⁴⁾

と後に述べている。回想録から小説に直す際に付け加えたヴィヨンの詩の要素が事実であるという記述は無く、やはり落書きがヴィヨンの詩であつたというのは虚構であるということだろう。ヴィヨンの詩（現実から虚構への翻訳）は、青春時代の儂さや貴重さを強調する（ヴィヨンの青春時代への思いを呼び起こす）という、多次元的な効果を作品に与えているのである。現実から虚構への翻訳、そして詩から小説への翻訳という、二つの翻訳性が指摘できる。

もう一つの関連作品『ジョセフと女子大学生』では、作品全体に翻訳調の文体を用いることで、言語、生い立ち、母国の持つ歴

史などの違うバックグラウンドを持つジョセフと女子大生と「私」——三者三様のデイスコミュニケーションを描いていると述べた。会話に同じ英語という言語を用いても、両者の社会的、歴史的背景の違いにより、すれ違いが生じてしまったのである。要するに、社会的、歴史的要因が、三者のコミュニケーションを大きく左右しているということがわかる。『ジョセフと女子大学生』は、コミュニケーションに隠れた社会性、歴史性という次元が、自己と他者との相互理解の妨げとなっており、言葉によって他者と分かり合うことの限界を、異文化同士の翻訳によって巧みに表現した小説なのである。

また、他者とのデイスコミュニケーション、言葉の限界という問題については、『鯉』『休憩時間』でも表現されているといえる。『鯉』では、「私」は青木が満腔の厚意から贈ってくれた「一尺の白色の鯉」（青木の想い）を大事にすることを青木に誓ったにも関わらず、途中、鯉を殺してしまおうとする場面、「私」なりに青木の幸せを考えて愛人に鯉を託す場面がある。しかし「私」は青木から追従者だと誤解されてしまい、青木が死んでしまったためにその誤解を解くことは永遠に不可能となってしまった。「一尺の白色の鯉」という言葉の力が存在していても、二人が完全に分かり合うことはできなかったのである。『休憩時間』では、学生たちが

分かり合うことはなく、最後にはある学生が黒板に書いてあった文字を拭き消し、何も書かないで笑いながら席に帰るといふ場面で騒動が終結する。何も書かないという無言の主張は、言葉で何かを説くことの限界を示しているとも考えられる。三作品とも、山椒魚と蛙の対立の様子を描いた『山椒魚』の作者である、井伏鱒二らしい作品であるともいえるだろう。

おわりに

本論では、井伏作品における言葉の力を証明することを目的に短編小説『鯉』について考察し、加えて関連作品として『休憩時間』、『ジョセフと女子大学生』という二作品を取り上げた。その結果、井伏作品に含まれた虚構が作り出す効果、井伏による翻訳という行為、言葉に隠された重層性、多次元性を解き明かすことができた。さらには、井伏は作品の中で言葉の限界という問題についても表現していることを明らかにすることができた。『鯉』の考察では、先行研究で見られなかった青木と「私」の同性間の恋愛的感情を漢文「鯉魚尺素」から証明することで、これまで読まれてきた『鯉』の解釈を覆すことができたと考えられる。『ジョセフと女子大学生』の考察は、井伏の短編小説の中でもマイナーな作品であるためか、先行研究が極めて乏しい中で試みても

のである。『ジョセフと女子大学生』については批評家・小林秀雄が「例へば『ジョセフと女子大学生』などは彼の代表的悪作だと思ひます」と評価していたようだが、今回の考察によって作品に込められたメッセーjジ性や作品の魅力を紐解くことができたのではないだろうか。本論で題材とした三作品は、言葉にひそむ力を巧みに用いた、まさに「翻訳者」としての井伏による珠玉の芸術作品といえることができるだろう。

参考文献一覽

- (1) 徳永恂「井伏鱒二論——黒・水中世界・自然のナルシズム——」日本文学研究資料刊行会・編『井伏鱒二・深沢七郎』有精堂出版株式会社、一九七七年十一月P61
- (2) 熊谷孝「井伏鱒二——〈講演と対談〉(株)鳩の森書房、一九七八年七月P63～63
- (3) 和田利夫「井伏鱒二『鯉』の成立と背景」『日本文学』一九七五年一月P60
- (4) 丹尾安典『男色の景色』新潮社、二〇〇八年十二月P29～30
- (5) 井伏鱒二著、紅野敏郎編解説『井伏鱒二 鶏肋集／早稲田の森』日本図書センター、一九九九年四月P34～37
- (6) 小尾郊一、岡村貞雄『古楽府』東海大学出版会、一九八〇年二月P181～182
- (7) 山本欣司『コレクシヨン・モダン都市文化第七六巻 博覧会』ゆまに書房、二〇一二年六月P438、P759
- (8) 農文協編『花卉園芸大百科16 観葉植物／サボテン／多肉植物』社団法人 農山漁村 文化協会 二〇〇二年三月P378
- (9) 「花言葉 誕生花 一覽」(閲覧:二〇一四年一〇月一日) http://www.youtube1.biz/archives/cat_2/post_279/
- (10) 本田済『漢書・後漢書・三国志列伝選』平凡社 一九六八年年六月P233
- (11) 堀内敬三、井上武士『日本唱歌集』岩波書店 一九五八年十二月P196
- (12) 同上同様。
- (13) 佐藤輝夫『増補 ヴィヨソ詩研究』中央公論社、一九七二年八月P214～217
- (14) 天沢退二郎・訳『ヴィヨソ詩集』株式会社白水社、二〇〇〇年九月P53～58
- (15) 佐藤輝夫『増補 ヴィヨソ詩研究』中央公論社、一九七二年八月P234
- (16) 細川哲士「フランソワ・ヴィヨソ」原野昇・編『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇七年二月P189
- (17) 上野格「日本におけるアイアランド学の歴史」『思想』No617 岩波書店、一九七五年一月P127
- (18) 矢内原忠雄『帝國主義下の印度 附アイルランド問題の沿革』株式会社大同書院、一九三七年三月P248
- (19) 井伏鱒二『夜ふけと梅の花山椒魚』講談社、一九九七年一月P75～76
- (20) 和田春樹、石坂浩一編集『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』岩波書店 二〇〇二年五月P102
- (21) 朝鮮人強制連行真相調査団編『強制連行された朝鮮人の証言』

- 明石書店、一九九〇年八月 p.13
- (22) 沼田卓爾「井伏さんの録音テープ(一)」『井伏鱒二全集第十八巻』筑摩書房 月報 一九九八年一月 p.2
- (23) 井伏鱒二、聞き手 中村明「遊」小沼丹・他『群像 日本の作家16 井伏鱒二』小学館、一九九〇年二月 p.101
- (24) 井伏鱒二「休憩時間」に「つら」『井伏鱒二全集第十三巻』筑摩書房、一九九八年九月 p.569
- (25) 小林秀雄「井伏鱒二の作品について」小沼丹・他『群像 日本の作家16 井伏鱒二』小学館、一九九〇年二月 p.83

辞典・事典

- ・『日本国語大辞典』小学館、二〇〇〇年
 - ・『漢字源』学習研究社、二〇〇七年
 - ・『大漢和辞典』大修館書店、一九八四年～一九八六年
 - ・『文学シンボル事典』東洋書林、二〇〇五年
 - ・『シンボル事典』北星堂書店、一九八五年
 - ・『イメージ・シンボル事典』大修館書店、一九八四年
 - ・『暮らしのことば新語源辞典』講談社、二〇〇八年
 - ・『広辞苑』岩波書店、二〇〇八年
 - ・『ブリタニカ国際大百科事典』ティビーエス・ブリタニカ、一九九一年
 - ・『世界シンボル辞典』三省堂、一九九二年
 - ・『新明解国語辞典』三省堂、二〇〇五年
- (二〇一五年度卒業)